

アンティオキア派聖書釈義の一背景としての「アレイオス派」ユリアノス

東京大学大学院総合文化研究科
地域文化 地中海 博士2年
砂田恭佑

目次

序	1
1. 1. 4世紀後半アンティオキアの教会情勢と「アンティオキア派」	3
1. 2 「アレイオス派の」ユリアノス——Hagedornの推定	4
2. 1. ユリアノスとヨアンネス：総合的比較	6
3. 1 ユリアノスによる伝統の創造	10
3. 2 ヨアンネス・クリュソストモスの「対抗説教」？	11
結. ユリアノス像、クリュソストモス像	12
文献一覧	13
一次史料	13
翻訳・研究文献	13

序

・アンティオキア派研究：70年代以降、従来の「アレクサンドリア派 vs アンティオキア派＝寓意 vs 字義・歴史」という枠組みの外から把握しようとする試みがなされてきた

・評価枠組みの見直し¹、「修辞学」²や「シリア性」³に基づく再評価、等

・F. Thome (2004)→「アレクサンドリア派」あるいは「オリゲネス派」への対抗とは別に、所謂「背教者」ユリアヌスのキリスト教批判に対する対抗をアンティオキア派、特にモプスエスティアのテオドロスの著述に見出そうとする

→歴史的にもある程度妥当。オリゲネス的・寓意的解釈との差分では得られない、テオドロスによる救済史的解釈の特質を明らかにした

・本発表：アンティオキア派の聖書釈義の一側面を、彼らが「アレイオス派の」ユリアノス（≠「背教者」ユリアヌス、エクラナムのユリアヌス等）の手になる諸文書に対抗した、という仮説を導入することで、闡明にする試み

¹ Wallace-Hadrill1982; O'Keefe2000; idem, 2015等を参照のこと。

² Schaublin1974等を参照のこと

³ Ter Haar Romeney1997, 武藤 2004等を参照のこと。

※以上が発表者の当初構想していたところだった。しかし分析が想定していたほど進まなかったこと、考察を確実にするにあたって考慮すべき要素が多すぎたことから、今回の発表では「アレオス派」ユリアノスとヨアンネス・クリュソストモスの関係にのみ焦点を当てることとする。発表題より小さな範囲を取り扱うことになってしまったことについてお詫び申し上げたい。

●さまざまな前提……

・アンティオキア派聖書釈義の研究において従来十分に検討されてこなかった要素：知恵文学（ここではヨブ記、箴言、コヘレト、雅歌、知恵）解釈⁴

→残存する註解が預言書（詩篇含む）に対するそれに偏っていることが一番の要因。しかしそれだけでなく、オリゲネス的な寓意との違いが最も際立つのが預言書註解であるからという側面もあると考えられる

→しかし、例えばモプスエスティアのテオドロス（350頃-428）の特質とされる歴史的な聖書本文批評にはソロモンによる諸書や『ヨブ記』に関する証言も含まれている。これを「高等批評の先駆け」と時代錯誤的に片付けることなく、その意味を十分に検討するためには、テオドロスのみならずアンティオキア派の「知恵文学」観を探る必要があるのでは？ 近年ヨアンネス・クリュソストモスの『ヨブ記註解』（Neyrand et Sorlin1988, Hagedorn1990）『箴言註解』（Bady2003）の校訂本、テオドレトス『雅歌註解』（Hill2001）の英訳等も利用可能になっている

☆発表者の過去の研究発表

・発表者は2019年に『箴言註解』からみるヨアンネス・クリュソストモスの「体罰否定論」という主題で2件研究報告を行った

・要点：古代末期において、ヨアンネス・クリュソストモス『箴言註解』と『使徒教憲』（*Constitutiones Apostolicae*）だけが『箴言』の体罰奨励句（特に13:24）⁵を、寓意的に解釈するでも修道規則に転用するでもなく、「実際の父子に妥当する道德律」と捉えて援用したこと⁶。および、前者が「自然の法」に基づく情愛を持ち出し手極端な体罰執行を戒める方向で釈義し、後者がそれを厳律として引用した点に差異がみられることを明らかにした

→『使徒教憲』の字義通りの解釈を、ヨアンネスが緩和している？ 以下、過去の発表で明らかにできなかったこと

・『使徒教憲』：使徒からローマのクレメンス（1世紀）の手で伝承されたと銘打つ教会

⁴ Cf. Gohl2013, pp. 258ff.

⁵ 「杖を控える者は自身の子を憎む。しかし[子を]愛する者は注意深く懲らしめる」：“ὁς φείδεται τῆς βακτηρίας, μισεῖ τὸν υἱὸν αὐτοῦ· ὁ δὲ ἀγαπῶν ἐπιμελῶς παιδεύει”.

⁶ Bady, 320 (in 13:24) および CA, 4.2.1.

規定集成で、実際には 381 年前後にアンティオキアで著わされたもの（のち詳述）。使徒あるいはクレメンスを騙った著者を、Hagedorn は『ヨブ記註解』著者でもある「アレイオス派」ユリアノス（Julianus Arianus, Julian the Arian. 以下略号 JA）と同定する

→ディオドロスのタルソス主教叙階（378）後、ヨアンネスおよびテオドロスがアンティオキアで聖職者として活動し始めた時代と一致

⇒ヨアンネスと JA は、同じ時代同じ地域で活動し、『ヨブ記註解』（知恵文学！）を夫々に著わし、ニカイア派とアレイオス派で対立し、体罰章句に異なる解釈を施した

→『ヨブ記註解』の比較を中心に、JA とヨアンネスの関係（4 世紀アンティオキアにおける大きな図式の一部）を考察してみたい

→→本発表へ

1. 1. 4 世紀後半アンティオキアの教会情勢と「アンティオキア派」

・ニカイア以降のアレイオス派論争：教会政治、具体的に言うと公認宗派の地位と主教座の継承をめぐる争い⁷

・アンティオキア：強固なニカイア派の大主教エウスタティオスが陰謀により失脚、以降アレイオス派が主教座を継ぐ。教理のみならず皇帝の教会会議に対する態度からアレイオス派の中でも分裂

・362 年にはアレイオス派（相似派⁸）から新ニカイア派（カッパドキア教父等と親交を持ったグループ）に転向したメレティオス（在位 360-381）、エウスタティオス派（強硬ニカイア派）のパウリノス（388 没）、相似派のエウゾイオス（在位 360-375 頃）、非相似派（エウノミオス派）のテオフィロス（365 頃没）が並び立つ事態に

・「アンティオキア派」タルソス主教ディオドロス（330 頃-390 以降）は、カイサレイア大主教バシレイオス（330 頃-379）およびアンティオキア大主教メレティオスと交友関係を持っていた。ディオドロスの弟子ヨアンネス・クリュソストモスもモプスエステアのテオドロスもメレティオス派に属することになる⁹

→教理上の対立に加えて、主教継承の正統性をめぐる問題も。メレティオス派はカッパドキア教父ら新ニカイア派の支持を、パウリノス派はアレクサンドリアおよびローマの強硬ニカイア派の支持を得ていた

・他方、359 年のセレウキア教会会議¹⁰からキリスト教相似派が信条を採択され、公認

⁷ このアンティオキア主教座をめぐる教会分裂について、詳しくは例えば、マルー1996, 90 頁を見よ。

⁸ 357 年の第二シルミウム信条以降形成されたグループ。「本質」という言葉を用いず父と子を「相似している」（ホモイオス）とする。詳しくは Hanson, p.557ff.

⁹ キュロスのテオドレトスの『教会史』もこの派閥の立場から書かれている。

¹⁰ Hanson, 371ff.

宗派の位置に。ユリアヌス帝とヨウリアヌス帝の短い治世を挟んで、ウァレンス帝（在位 364-378）はニカイア派も非相似派（エウノミオス派）も排して相似派を支持¹¹。ウァレンス帝戦死（378年）とテオドシウス1世のコンスタンティノポリス入城（380年）により事態は急転、ニカイア派がその位置に代わる。コンスタンティノポリス公会議（381年）で当初の議長を務めたのは正統と認められたアンティオキア主教メレティオス（会期中に没）

→ヨアンネス（381年助祭、386年司祭）やテオドロス（383頃司祭、392モプスエスティア主教）は以上の情勢下で活動

1.2 「アレイオス派の」ユリアノス——Hagedornの推定

・件のユリアノスの名は、唯一『ヨブ記註解』写本にのみ伝わる

・『ヨブ記註解』（Incipit: Σημαίνει ἡ βίβλος）：一本の写本（Z）はオリゲネス、二本の連鎖式註解（catena）写本はハリカルナッソスのユリアノス（6世紀、Aphthartodocetaeの主唱者）に帰す。他は著者の名を記さず

→Usener, Dieu がハリカルナッソスのユリアノスを著者とし、その旨アルメニア語訳への序文でも繰り返される¹²

・Draguet が①著者の教理上の立場から②文献学的証拠から著者を「ハリカルナッソスの」ではないと推定、ある「アレイオス派の」ユリアノスと命名¹³

→Hagedorn がこれに続き、さらに主として表現や語法が共通することから、このJAを『使徒教憲』（原題 Διαταγαὶ τῶν Ἀγίων Ἀποστόλων. 通称はラテン語で *Constitutiones Apostolicae*, 以下 CA）およびイグナティオス書簡集のうちの偽作部分（以下 *Ps. Ign. epp.*）の編纂者と同一であると推定¹⁴。なおその他の経歴等は知られていない¹⁵

・CA: 『使徒の教え』（*Didascalia Apostolorum*. 2-3世紀。ギリシア語版は散逸、ラテン語版、シリア語版等が現存）に手が加わった、教会規律・規定を収めたギリシア語八巻本。CAは題の通り、使徒からローマのクレメンスを通じて伝承された教会規定とされ、CA そのものにおいて自己言及的に聖書正典に加えられている¹⁶。トゥルッロス会

¹¹ Ibid., p. 582.

¹² Cavalcanti, s. v. “Julian, Arian (4th c.)” in di Berardino, 2014[2007], vol. 2, p. 482.

¹³ Hagedorn 1973, XXXV. Julian the Arien や Julian (Arianer) などの表記がみられる。本発表では、所謂アレイオス派をひとくくりにしてではなく、便宜的にそう呼ぶという意味を込めて鉤括弧を付け「アレイオス派の」ユリアノスと表記する。

¹⁴ Draguet 1924. Cf. Hagedorn, *ibid.*, XVII-VI.

¹⁵ Nautin は Hagedorn 説に賛同したうえでフィロストルギオス『教会史』（5世紀）に出るアナザルプス主教ユリアノスに同定するが、疑わしい。S. v. “Apostolic Constitutions” in di Berardino, vol.1, p. 197.

¹⁶ VIII, 47: Ἐστω δὲ ὑμῖν πᾶσι κληρικοῖς καὶ λαϊκοῖς βιβλία σεβάσματα καὶ ἅγια τῆς μὲν παλαιᾶς διαθήκης Μωσέως πέντε. Κλήμεντος δύο, καὶ αἱ Διαταγαὶ ὑμῖν τοῖς ἐπισκόποις δι’ ἐμοῦ Κλήμεντος ἐν ὀκτῶ βιβλίοις προσπεφωνημένοι, ἃς οὐ χρὴ δημοσιεύειν ἐπὶ πάντων

議 (692) 第二規定で既に異端的として排斥されている¹⁷

・ *(Ps.)Ign.epp*: テキストは Diekamp und Funk 1913, 83-268 による。元はアンティオキアの第二代監督 (主教) イグナティオス (110 頃殉教) のものとされる書簡集。19 世紀以来真正と認められている七通に、4 世紀以降偽作が加えられたものも流通していた (*recensio longior*)。ここで取り扱う「偽作部分」とは、①真正書簡各節に対する付加部分②六通の偽作書簡 (マリアから、マリアへ、タルソスのキリスト者たちへ、フィリピのキリスト者たちへ、アンティオキアのキリスト者たちへ、ヘロンのキリスト者たちへ) との両方を指す

※ *CA* と *Ps. Ign. Epp* の編纂者同一説: Ussher¹⁸が初めて指摘し、Harnack がこれを支持¹⁹

・ Hagedorn 説: Cavalcanti²⁰, Chadwick, Metzger などが支持²¹

→ Gilliam などが反対²²

☆ 教理上の立場

・ 『ヨブ記註解』: Hagedorn は後述するヨブ 38:28-9 註における「父」と被造物との峻別にに基づき、*JA* は相似派よりも非相似派に近いと判断する。しかし 4 世紀のアレイオス派について詳しく論じた Hanson は、その教理的立場を厳密に確定せずに『ヨブ記註解』を引用する。確かに非相似派的特徴は見られるが (後述)、発表者は、少なくともアリストテレス的概念や三段論法を用いるアエティオス・エウノミオスの特質はユリアノスに見られないことを指摘しておきたい

・ *CA*: 曖昧だがアレイオス派的。仲介者としてのキリスト²³、霊の父子への従属²⁴。発表者は、大胆な偽著者名を用いた教会規定という文献の特質上、その著者・担い手としては事実上の公認宗派の位置にあった相似派がよりふさわしいと考える

・ *Ps. Ign. epp.*: アレイオス派的。唯一の神としての父、唯一の仲介者としてのキリス

διὰ τὰ ἐν αὐταῖς μυστικά.

¹⁷ ἐπεὶ δ' ἐν τοῖς τοιοῦτοις κανόνισιν ἐντέταλται δέχεσθαι ἡμᾶς τὰς τῶν αὐτῶν ἁγίων ἀποστόλων διὰ Κλήμεντος διατάξεις, αἰσισι πάλαι ὑπὸ τῶν ἑτεροδόξων ἐπὶ λύμῃ τῆς ἐκκλησίας νόθα τινὰ καὶ ξένα τῆς εὐσεβείας παρενετέθησαν τὸ εὐπρεπὲς κάλλος τῶν θείων δογμάτων ἡμῖν ἀμαυρώσαντα, τὴν τῶν τοιοῦτων διατάξεων προσφόρως ἀποβολὴν πεποιήμεθα πρὸς τὴν τοῦ χριστιανικωτάτου ποιμνίου οἰκοδομὴν καὶ ἀσφάλειαν, οὐδαμῶς ἐγκρίνοντες τὰ τῆς αἰρετικῆς ψευδολογίας κῆματα καὶ τῆ γνησίᾳ τῶν ἀποστόλων καὶ ὀλοκλήρῳ διδαχῇ παρενείροντες. ACO, II, ii, 4.

¹⁸ Ussher 1647, LXIIIff.

¹⁹ Cf. Hagedorn, S. XXXVIII.

²⁰ Cavalcanti, loc. cit.

²¹ Gilliam 2017, pp. 104-7.

²² Cf. *ibid.* なお当該書籍に対する書評を一瞥する限りでは、Gilliam の批判はあまり賛同者を得ていないようである。

²³ Metzger, II, p. 29.

²⁴ *Ibid.*, p. 33.

ト²⁵。なおキリスト＝裸の人間説への反駁をも行っており、アレイオス派教理研究においても重要²⁶

⇒ここでは Hagedorn 説を採り、三書の著者を同一人物とする。三書において教理上の立場に一貫性があるかどうかの判断は難しい。ただその点は、教会政治史的にも思想的にも変転の著しい時代であるから、同定の障害になるとは思われない。ゆえにここでは、Hagedorn の判断を概ね受け入れつつ、三書を必ずしも特定の信条に拘束されないアレイオス派的立場をとる、伝統の粉飾によりその権威を強化する必要がある集団（発表者は相似派≒多数派を想定）に属した、同じ人物 JA の手になるもの、もしくは、同じグランドデザインを共有する集団により編纂されたものと推定する（以下三書を「JA 文書」と総称）

2.1. ユリアノスとヨアンネス：総合的比較

※以下、両者のヨブ記註解の箇所を指示する際、JA＝「アレイオス派の」ユリアノス、JC＝ヨアンネス・クリュソストモスのそれを指す略号とし、Hagedorn の手になる校訂本をページ数および行数、註解対象の章節で示すものとする。なおヨブ記は七十人訳とマソラ本文との相違が激しく、しばしば大幅な書き足し等も見られるが、本稿では全て七十人訳に基づいて章節を指示する。

・ユリアノス『ヨブ記註解』：逐条註解。説教ではなく書き下ろしの註解。『ヨブ記』全体に対する註解が残存しているが、しばしば *locus desperatus* が見出される。Hagedorn は 357-365、遅くとも 380 年までに記されたと推定²⁷

・ヨアンネス・クリュソストモス『ヨブ記註解』同じく逐条註解。説教的な文体もしばしば見られるが説教ではない。真正性は確か²⁸。奇妙なことに、Hagedorn, Sorlin ともに年代についての議論を省略している。報告者は、細かい事柄に関する論争的口調がしばしば見られることや、文体が多少粗削りなこと²⁹、387-390 年頃に著わされた『箴言註解』と積義主題・形式ともに類似がみられること、他の註解的説教の年代、神だけをバシレウス（王、皇帝）と想定して「バシレウスは法に従属するのではなく優越する」とみなすナイーヴな書き方（コンスタンティノポリス大主教期であれば皇帝の場合に触れないわけにいかないのではなかろうか？）³⁰等からアンティオキア期、遅くとも 390 年代後半までに著わされたと推定する

²⁵ Ad Tarsenses 4.2, Ad Antiochenos 4.3.

²⁶ E.g. In Tarsenses 2.1. Cf. Hanson, p. 113ff.

²⁷ Hagedorn, LVI.

²⁸ Sorlin, p. 33ff.

²⁹ Ibid., p. 34.

³⁰ JC, 174.28-175.2 (in 34:18a).

- ・ユリアノス：主人公ヨブはアブラハムから五代目の者であり（モーセ以前³¹）、著者はモーセ。モーセが、過去のこととして『創世記』を、現在～未来のこととして『ヨブ記』を、神の恵みにおいて預言し記した
- ・ヨアンネス：「ある人々は、彼はモーセ以前の人であり、アブラハムから五代目の人だと言い、またある人々は律法の時代の人だと言う」³²が、モーセが律法をもたらすより前に徳行を遂げたのと、そのあとにそうしたのでは偉大さが異なる。しかしエゼ 14:14, 20 における証言や、『ヨブ記』にモーセの名が出ないことから、ヨブは律法「以前」の人であり³³、律法以前に徳を追い求めた³⁴人物であると結論。著者には触れない
→モーセ以前とする点では共通。しかし、前者はモーセの権威に結びつけ、後者はそれから断ち切ることで偉大さを強調。「自然の法」の律法に対する優位は、クリュソストモスが頻繁に強調するところ

○ヨブ冒頭は頌辞か？

ヨブ 1:1

アウシテイスの村にある人がいて、名をヨブと言った

Ἄνθρωπος τις ἦν ἐν χώρᾳ τῇ Αὐσίτιδι, ᾧ ὄνομα Ἰώβ

- ・ユリアノス：「モーセは……頌辞（ἐγκώμια）から始めるのでも梗概で喜ばせるのでもなく、むしろ自然に単純な事柄から叙述を始める」³⁵。ヨブも他者同様の人間。「人間性は一つ、造り主もおひとり」³⁶。「男の徳は本来の賞で飾られれば、他の賞賛などなくとも全ての頌辞を上回るものだから」³⁷

³¹ JA, 1.10-2.4 (Pr.); εἰ δέ τις ἀντιλέγων μὴ πείθοιτο Μωσέως εἶναι τὴν γραφὴν διὰ τὸ μὴ κατὰ τὸν αὐτὸν χρόνον Ἰώβ καὶ Μωσέα γεγενῆσθαι, ἐντεῦθεν πείθειν αὐτὸν προσήκει, ὡς ὅτι τὸ τῆς Γενέσεως βιβλίον αὐτὸς ἰστόρησεν οὐχ ὡς παρῶν ἡνίκα τὰ πάντα ἐγένετο (τρισχιλίων γὰρ ἐτῶν πράξεις συνέταξεν), ἀλλ' ἐκ τῆς τοῦ θεοῦ χάριτος τῆς αὐτὸν ἀναδειξάσης προφήτην τῶν τε παρωχηκότων καὶ ἐπιόντων καὶ ἱεροφάντην τῶν θείων μυστηρίων καὶ τῶν ἔργων τοῦ θεοῦ καὶ τῆς καταλλήλου ἐφ' ἐκάστου αὐτῶν προνοίας μεγαλοφωνότατον κήρυκα.

³² JC, 1.4 (Pr.); τινὲς μὲν οὖν αὐτὸν φασὶ πρὸ τοῦ Μωσέως εἶναι καὶ πέμπτον ἀπὸ Ἀβραάμ, τινὲς δὲ ἐν τῷ νόμῳ.

³³ Ibid., 2.7-8: καὶ γὰρ ἐμοὶ δοκεῖ πρὸ τοῦ νόμου εἶναι,

³⁴ Ibid., 3.2-3. またクリュソストモスはヨブによる子供の教育を、キリストの到来以前にも関わらず教育に手を尽くしたとして高く評価する。この点は『箴言』体罰章句とも併せて考えるべきかもしれない。Danassis, p. 94.

³⁵ JA, 5.1-5 (in 1:1a): ὁ τοῦ θεοῦ ἄνθρωπος Μωσῆς τὰ κατὰ τὸν μακάριον Ἰώβ οὐκ ἐξ ἐγκωμίων ἤρξατο οὐδὲ τῆ ὑποθέσει ἐχαρίσατο, ἀλλ' ἀτεχνῶς ἐκ τοῦ ἀπλοῦ ἀρχεται τῆς διηγήσεως.

³⁶ Ibid., 5.6-7: μία γὰρ ἐστὶν ἀνθρωπότης καὶ εἷς ὁ ταύτης δημιουργός.

³⁷ Ibid., 6.2-3: ἐπεὶ περ πάντων ἐγκώμιον ἢ τοῦ ἀνδρὸς ἀρετὴ ὑπερβάλλει ἐξ οικείων ἄθλων

・ヨアンネス：「第一の頌辞（ἐγκώμιον）を見よ。人がいた。実のところこれは小さな頌辞ではない、「人がいた」というのは。曰く、「アウシテイスの村に」。これもまた大きな頌辞だ。というのもアラビア、万人が墮落していて、いかなる良き秩序の模範もない地にいたということ、それが驚くべきことだから」³⁸

→ヨアンネスの「頌辞」強調はそれ自体ではやや不自然だが、ユリアノスの評価に対する批判と解しうる。

・以上ヨブをどう位置付けるかに関する違いは、『ヨブ記』自体の解釈以上の論争につながる

○ヨブ記の証言の妥当性①ヨブ 38:28 は「同一本質」否定か？

ヨブ 38:28-9 (JA, 269.3-5)

〔誰が雨の父なのか？〕^{1a} それで誰が露の〔凝縮と〕^{1b} 塊を生む者か？水晶は誰の胎から出てくるのか？〔誰が天にあられを生むのか、流れる雨のように降るあられを？〕²

〔τίς ἐστιν ὑετοῦ πατήρ;〕^{1a} τίς δέ ἐστιν ὁ τετοκῶς [συνοχᾶς καὶ] ^{1b} βώλους δρόσου; ἐκ γαστροῦ δὲ τίνος ἐκπορεύεται κρύσταλλος, [πάχνην δὲ ἐν οὐρανῷ τίς τέτοκεν, ἢ καταβαίνει ὡς ὕδωρ ῥέον;] ²

1ab om. JA in loco posteriore (270.10)

2 om. JC

・ユリアノス：「これらを同一本質派の連中に対し朗読するように」³⁹。「胎」「出産」を「権能」（ἐξουσία）と「意志」（θέλησις）を表すものと解し、「もし私たちが子に関するものとして（ἐπὶ τοῦ υἱοῦ）これらの言葉を聞くなれば」、父が子を何らの変化も蒙らずに、何らの質料も自らの本質も用いることなく出生したことが語られている、とする
→論点が不明瞭だが、「何ら……自らの本質も用いることなく」が問題であると思われる。相似派含むアレイオス派は、父は子を無から創造（＝出生）し、子を仲介者として他の事物を創造したとした。他方ニカイア派は、子は父の本質より造られずして生まれたもので、他の被造物とは全く異なる存在次元をもつものとした（ニカイア信

κοσμουμένη ἀλλ' οὐκ ἐξ ἀλλοτρίων ἐπαίνων.

³⁸ JC, 3.11-15 (in 1:1a): ὄρα πρῶτον ἐγκώμιον· ἄνθρωπος ἦν. οὐ γὰρ δὴ μικρὸν ἐγκώμιον τοῦτο, τὸ ἄνθρωπον εἶναι. ἐν χώρα, φησὶν, τῆ Αὐσίτιδι. καὶ τοῦτο μέγα ἐγκώμιον. τὸ γὰρ ἐν Ἀραβία εἶναι, ἐνθα πάντες ἦσαν διεφθαρμένοι, ἐνθα οὐδὲν ὑπόδειγμα ἦν εὐνομίας, τοῦτο ἦν τὸ θαυμαστόν.

³⁹ JA, 270.11-12 (in 38:28-29): ἀνάγνωθι ταῦτα τὸν χρόνον αὐτὸς πρὸς τοὺς ὁμοουσιαστας.

条)⁴⁰

→ヨブ記の記述を寓意的に解したうで子に適用し、教理の証言とする

・ヨアンネス：「胎」「出産」が「造成」(διάπλασις)と原因(αἰτία)を表すもので、自然の現象が一なる原因に帰されるべきことを確認してから、もしそれらのことが「子に関するものとして言われるならば、彼らはそれらを余計に移し替えていることになる」⁴¹。ここで「子」や「出生」という用語は用いられていないため

→本節の「子」への適用自体が妥当ではない、という批判。それ以上教理的内容に踏み込まず

☆他にも、ヨブ 2:9Aa、すなわち「見よ、私はもう少し耐えられる」⁴²以下の台詞がヨブの妻のものではない、とユリアノスが註記し⁴³、ヨアンネスがそれを「ある人々が言うには」という形で引用・採用している箇所も⁴⁴

○JA『ヨブ記註解』における教理への言及

・聖霊は創造主ではない (205.14-206.3, in 33:4)
・父のほかに創造主なく、子のほかに仲介者(μεσίτης)なし。父に比肩するものはなく、何物も父に同一本質でも相似本質でもありえず、相似してもいない (245.7-246.9, in 37:22)

○小括

「アレイオス派」ユリアノスはヨブをモーセの権威に結びつける。さらにしばしば教理的証言としても用いた。『使徒教憲』における立法者にして預言者としてのモーセ像をこれに関連付けられるとするならば、これはアレイオス派による広報戦略ともいえる。『ヨブ記』は単なる知恵文学ではなく、靈感を持った著者による義人伝ということになり、(アレイオス派的)教理をも正当な権威をもって証言する書物となる。他方でヨアンネスは、ヨブを律法以上の「自然の法」を体現する偉人として位置付けつつ、『ヨブ記』著者の問題を棚上げする。さらに教理的証言の妥当性を否定する。自然、ヨアンネ

⁴⁰ Hanson, pp. 201-2, n. 102.

⁴¹ JC, 189, 22-3 (in 38:28a-29a): ὥστε κὰν ἐπὶ τοῦ υἱοῦ ταῦτα λέγηται, περιπτῶς αὐτὰ περιφέρουσιν.

⁴² ἰδοὺ ἀναμένω χρόνον ἔτι μικρὸν.

⁴³ JA, 27.3-4 (in 2.9β-9A): οὐκ ἔστι τῆς γυναικὸς ὁ λόγος, κὰν διὰ τῆς γυναικὸς ἐρρήθη, ἀλλὰ τοῦ πολλὰ καμόντος καὶ μηδὲν ἀνύσαντος.

⁴⁴ JC, 41.5-8: τινὲς δὲ φασιν οὐδὲ τῆς γυναικὸς εἶναι τὰ ῥήματα, ἀλλ' αὐτὸν εἰς αὐτὴν τυπωθέντα ταυτὶ φθέγγεσθαι. οὐδὲ γὰρ ἦν τὴν γυναῖκα τοῦ Ἰώβ τοιαύτην εἶναι, πλὴν εἰ τις λέγοι τῇ συμφορᾷ περιτραπέισαν τοιαύτην αὐτὴν γεγενῆσθαι.

スの註解が提示するヨブ像はユリアノスのそれに比べてより鮮明に「模倣すべき義人」の性格を持ち、その限りで読者と直接の関係を持つことになる。

ヨアンネスがユリアノスの著作を知っていたことは疑いが無い。その対抗関係（もっとも、おそらくヨアンネスによるユリアノスへの一方的な対抗関係だが）は、アンティオキア教会史の情勢に照らせばメレティオス派によるアレイオス派反駁の一事例とみなせよう。他方、これをユリアノス文書全体に適用することは可能だろうか。次節ではこれを論じる。

3.1 ユリアノスによる伝統の創造

・ユリアノス文書は一見ジャンルも主題も異なる三つの書物から成る。その選定に必然性は？

・CAおよび*Ps. Ign. Epp*は大胆な偽作。まずはCAの戦略を整理する。それに照らして*Ps. Ign. Epp*を見ることで、JAが使徒から「私たち」に至るひとつの系譜を作り上げようとしていたという仮説が成り立つ

▽「使徒→ローマのクレメンス」：CAの継受にかかわる基本的な構想。これを強めるためにCAおよびクレメンス書簡の「正典認定」（前述）が含まれる⁴⁵

▽「ローマのクレメンス→アンティオキアのイグナティオス」：各地の監督を名指しする中で、アンティオキアのイグナティオスの名が出る（CA7.46）。更には、パウロがイグナティオスを任命したことをクレメンスが確証している、という記述が、イグナティオス書簡偽作部分に追加されている（「マリアへ」⁴⁶、「トラレスへ」偽作部分⁴⁷、「フィラデルフィアへ」偽作部分⁴⁸）

⁴⁵ 有名な話だが、新約聖書アレクサンドリア写本は二つのクレメンス書簡をも収録している。なお、4世紀のアレイオス派が既存の異端文書に手を加えて完成させたとされる『偽クレメンス説教集』（*Pseudo-Clementine Homilies*）、より正しく言えば『クレメンス物語』（*Klementia*）が存在し、ローマ出身の青年クレメンスが旅に出て使徒ペトロと出会いともにシリア沿岸説教行に出かけるという筋書きとなっている。ユリアノス文書の構想との関係で非常に興味深いのが、本発表では詳しく言及することができない。テキストはIrmischer et al.1969、訳はSmith1886、文書の性格と来歴についてはIrmischer and Strecker1992を参照。

⁴⁶ Ad Mariam 4.1: Ἐπέρχεται δέ μοι λέγειν, ὅτι ἀληθινὸς ὁ λόγος, ὃν ἤκουον περὶ σου, ἔτι οὐσης σου ἐν τῇ Ῥώμῃ παρὰ τῷ μακαρίῳ πάπῃ Ἀνεγκλήτῳ, ὃν διεδέξατο τὰ νῦν ὁ ἀξιομακάριστος Κλήμης, ὁ Πέτρου καὶ Παύλου ἀκουστής.

⁴⁷ Ad Trallianos 7.4: τί δὲ διάκονοι ἀλλ' ἢ μιμηταὶ Χριστοῦ, διακονοῦντες τῷ ἐπισκόπῳ ὡς Χριστὸς τῷ πατρὶ καὶ λειτουργοῦντες αὐτῷ λειτουργίαν καθαρὰν καὶ ἄμωμον, ὡς Στέφανος ὁ ἅγιος Ἰακώβῳ τῷ μακαρίῳ καὶ Τιμόθεος καὶ Λίνος Παύλῳ καὶ Ἀνεγκλητός καὶ Κλήμης Πέτρῳ;

⁴⁸ Ad Philadelphianos 4.4: ..., ὡς τοῦ ἡγαπημένου μαθητοῦ, ὡς Τιμοθέου, ὡς Τίτου, ὡς Εὐοδίου, ὡς Κλήμεντος, なお真偽イグナティオス書簡中クレメンスの名が出るのは偽作部分のみ。

⇒ここでアンティオキア主教座に系譜がつながる。ユリアノス文書が直接形成しようとする系譜は以上だが、以降アレイオス派に至るまでに重要な人物としてルキアノスがいる

▽「ルキアノス」：JA『ヨブ記註解』で釈義断片を引用する⁴⁹。ルキアノスはアレイオスやニコメディアのエウセビオスら初期アレイオス派の面々が師と仰いだらしい人物⁵⁰

⇒ルキアノスはともかく、使徒→クレメンス→イグナティオスの系譜はかなり意図的と思われる。さらにその系譜の正統性を示す偽書に教理的言及も散りばめられたのであった。これは相似派の公的宗派としての立場を補強する必要があった時代に合致？

3.2 ヨアンネス・クリュソストモスの「対抗説教」？

クリュソストモスの膨大な説教群の中には、ユリアノス文書の系譜に登場する人物に関する説教もある

・パウロ書簡釈義説教、『使徒パウロ頌』等：ヨアンネスのパウロに対する敬愛は改めて言うまでもない

・『イグナティオス頌』：使徒継承、アンティオキア教会における司牧の偉大さ（4節）、殉教を強調→思想・書簡の存在は無視（他著作でイグナティオスを引用した証拠も管見の限りなし）。主教に求められる役割の部分はパウロ書簡から説明

・『ルキアノス頌』：殉教者としての性格の強調。アレイオスらには触れない
⇒以上ユリアノス文書と重複する部分。なおヨアンネスは「ローマのクレメンス」⁵¹に一度も言及しない。さらに……

・『エウスタティオス頌』：アンティオキア主教エウスタティオスの賞賛説教。アレイオス派非難、現主教フラウィアノスとの師弟関係の示唆⁵²、司牧義務の継承を強調

・『メレティオス頌』：受難に置ける有徳な態度、首府たるコンスタンティノポリスの公会議中に没したのは神の導き、フラウィアノスの後継者としての十全性への言及

→本来断絶のあるアンティオキア伝統継承を、「被迫害の英雄」「殉教者」の系譜になぎなおすもの

⇒ヨアンネスもまた正当な系譜を作り出すことを意識。しかしJAとは戦略？を異にする。聴衆に対する直接的な倫理的勧告、およびその題材としての「殉教者」という形式のもとに、小さな単位で系譜を形作っていく

⁴⁹ JA30.22 (in 2:10)

⁵⁰ ルキアノスについては、Hanson, pp. 5, 26, 31ff.

⁵¹ TLGの単語検索(Lemma)で”Κλήμης, -εντος, ὁ”を検索した。出力された3件はいずれも新約書簡(フィリピ4:3)に登場するクレメンスであり、それをローマのクレメンスと関連付けるような書き方はなされていない。

⁵² 10節。前述の通り、フラウィアノスおよびヨアンネスが属するメレティオス派はエウスタティオスと主教継承の点で接続しない。『ルキアノス頌』の記述がアンティオキア教会分裂という状況で持ちうる戦略については、Mayer2006, p. 50を参照。

○小括

ユリアノス文書は、少なくとも残存する『使徒教憲』とイグナティオス書簡偽作部分から見る限り、使徒に始まりアンティオキアのアレイオス派につながる正統的系譜の形成を目指して大胆に創作されたものであった。ヨアンネス・クリュソストモスの殉教者説教の一部は、この諸偽書を踏まえてなされたものかもしれない。しかし一貫して直接的な反論は行われぬ。説教というメディアの都合上それは当然ともいえるが、ともかくヨアンネスが行ったのは説教の主人公と聴衆を直接結ぶような倫理的説教だった。ユリアノス文書の系譜は黙殺される。

2節で検討した、『ヨブ記註解』をめぐる両者の関係を想起してみたい。そこでも対立点は、ユリアノスがヨブ記著者をモーセとしたうえでアレイオス派教理の証言を見出し、ヨアンネスがヨブ記著者の問題を棚上げにして教理論争への転用を回避したという部分にあった。発表者は、用意した材料が論証に必要なぶんには足りていないことを自覚するが、それでも共通点を見出すことができると考えている。

結. ユリアノス像、クリュソストモス像

・「アレイオス派」ユリアノス像を教会史の中に位置付けることができるか？

→発表者も未だ逡巡。ユリアノス文書のより広汎な読み込みを要する

・ヨアンネスのユリアノスへの（一方的な？）対抗は、広くニカイア派のアレイオス派反駁の中に位置付けられようが、例えばアタナシオスによる激しいアレイオス攻撃や、カッパドキア教父の哲学・論理学を用いたエウノミオス駁論と併せて考える必要がある

・ヨアンネス・クリュソストモス：字義的解釈と倫理的勧告を重んじ、教理史への貢献は少ないとされる。それは誤りではないし、批判にも様々な形がありうる。しかしこれまでの分析によれば、例えば教理への明確な言及を避けたのは、ユリアノス文書に代表されるアレイオス派の教理と正統系譜とのパッケージによる反撃を避けるため、倫理的勧告という手段を好んだ一つの目的は、主教位継承という点に「脛に傷持つ」ニカイア派メレティオス派の立場から一般信徒の聴衆に直接語り掛けることで支持を得ようとしたため、とみなすことができる。「自然の法」を万人に該当する原理として多用したのもその一環？

・最後に：モプスエスティアのテオドロスは『ヨブ記註解』のラテン語断片において、ソロモンの著作は預言の賜物ではなく知恵の賜物によって著わされたもの、ヨブ記著者は異教徒であり「本来の」ヨブ記に多数の書き足しを施したためこれを除外せねばならない、等と述べる

→従来は歴史的批判 (historical criticism) という観点からのみ片付けられてきたが、

ユリアノス文書あるいはヨアンネスの著作との関係にこれを位置づけられるかどうか？ 少なくとも、テオドロス・バル・コーナイ (8-9c) はテオドロスのために、「賜物」の区別をアレイオス派による箴 8:22 引用に対抗して用いたと証言している⁵³。今後の課題

文献一覧

一次史料

Bady, G., *Le Commentaire Inédit sur les Proverbes Attribué à Jean Chrysostome*, Université Lumière - Lyon 2., 2003.

Diekamp F., and Funk F.X., *Patres apostolici*, vol. 2, 3rd edn., Tübingen: Laupp, 1913.

Funk, F.X., *Didascalia et Constitutiones apostolorum*, t, I-II. Paderborn: libraria Ferdinandi Schoeningh, 1905.

Hagedorn, D., *Der Hiobkommentar des Arianers Julian*. Berlin: De Gruyter, 1973.

Hagedorn, U. and Hagedorn, D., *Johannes Chrysostomos: Kommentar zu Hiob*. Berlin, New York: De Gruyter, 1990.

Irmscher, J., Paschke, F., and Rehm, B., *Die Pseudoklementinen I. Homilien*, 2nd edn. Berlin: Akademie Verlag, 1969, 23-281.

Neyrand, L. and Sorlin, H., *Jean Chrysostome: Commentaire sur Job, t. I-II*. Paris: Les Éditions du Cerf, 1988.

翻訳・研究文献

Di Berardino, A., Oden, T.C., Elowsky, J.C., and Hoover, J., *Encyclopedia of ancient Christianity*. 3 vols. transl. by Papa J.T., Koenke, E.A., Hewett, E.E, 2014 [2006-2008].

Boziniš, C.A., “The natural law in John Chrysostom” in: *Revisioning John Chrysostom: New approaches, new perspectives*, DE WET, C.L. and MAYER, W. (eds.), Brill: Leiden. Boston, 2019.

Danassis, A.K., *Johannes Chrysostomos: pädagogisch-psychologische Ideen in seinem Werk*. Bonn: Bouvier Verlag Herbert Grundmann, 1971.

Draguet, R. “Un commentaire grec arien sur Job”. *Revue d'histoire ecclésiastique*, 24 (1924) , 38–65.

Gilliam III, P. *Ignatius of Antioch and the Arian Controversy*. Leiden: Brill, 2017.

Gohl, J.M., *Performing the Book of Proverbs: Engaging Proverbs as Christian Scripture*. The Faculty of the Lutheran Theological Seminary at Philadelphia, 2013.

⁵³ Gohl, p.259, n. 4.

Hanson, R., *The Search for the Christian Doctrine of God: The Arian Controversy, 318-381*. London: T&T Clark, 1988.

Hill, R.C., *Theodoret of Cyrus: Commentary on Song of Songs*, Washington, D.C.: Catholic University of America Press, 2001.

Irmscher, J. and Strecker, G., "The Pseudo-Clementines" In: *New Testament Apocrypha: Volume II: Writing Related to the Apostles, Apocalypse and Related Subjects*. W. SCHNEEMELCHER and R.M. WILSON (eds.), Louisville, Kentucky: Westminster Press, pp. 483-541, 1992 [1989].

Mayer, W. and Neil B., *St John Chrysostom: The Cult of the Saints - Select homilies and letters*, St Vladimir's seminary press: Crestwood, New York, 2005.

Metzger, M., *Les Constitutions apostoliques, t. I-II*. Paris: Les Éditions du Cerf, 1985-6.

O'Keefe, J.J., "A Letter that Killeth": Toward a Reassessment of Antiochene Exegesis or Diode, Theodore, and Theodoret on the Psalms. *Journal of Early Christian Studies: The Johns Hopkins University Press*, 8(1), 2000, pp. 83-104.

O'keefe, J.J., "Theodoret's Unique Contribution to the Antiochene Exegetical Tradition: Questioning Traditional Scholarly Categories" In: *The Harp of Prophecy: Early Christian Interpretation of the Psalms*. B. AND KOLBET, P. R. (eds.), Notre Dame: University of Notre Dame Press, pp. 191-203, 2015.

Schäublin, C., *Untersuchungen zu Methode und Herkunft der antiochenischen Exegese*. Theophaneia: Beiträge zur Religions- und Kirchengeschichte des Altertums 23 edn. Köln, Bonn: Peter Hanstein, 1974.

Smith, T. (tr.), *The Clementine Homilies*. in: Roberts, A. et al. (eds.), *The Ante-Nicene Fathers: Translations of the Writings of the Fathers Down to A.D. 325*. New York: Charles Scribner's Sons, 1886.

Ter Haar Romeney, R. B., "Eusebius of Emesa's Commentary on Genesis and the origins of the Antiochene School" In: J. FRISHMAN and J. VAN ROMPAY, eds, *The Book of Genesis in Jewish and Oriental Christian interpretation*. Leuven: Peeters, pp. 125-142, 1997.

Thome, F., *Historia contra Mythos : die Schriftauslegung Diodors von Tarsus und Theodors von Mopsuestia im Widerstreit zu Kaiser Julians und Salustius' allegorischem Mythenverständnis*. Bonn: Borengässer, 2004.

Ussher, J., *Polycarpi et Ignatii epistulae*, Oxford 1644.

Wallace-Hadrill, D.S., *Christian Antioch: a study of early Christian thought in the East*. Cambridge [Cambridgeshire], New York: Cambridge University Press, 1982.

荒井献編『使徒教父文書』講談社, 1974.

武藤慎一『聖書解釈としての詩歌と修辞——シリア教父エフライムとギリシア教父クリュソストモス』教文館, 2004.

マルー, H.I『キリスト教史 2 教父時代』上位大学中世思想研究所(編訳・監修), 平凡社, 1996.